

日本旧石器学会

ニュースレター 第46号  
NEWS LETTER No. 46

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



## 長野県佐久市香坂山遺跡の発掘調査

国武 貞克 (奈良文化財研究所)

### 1. 発掘調査の学術的な背景

古日本列島における後期旧石器文化の始まりについて多くの議論が出され始めたが、石刃石器群の始まりについては、未だその起源がみえてこない。石刃石器群としては列島最古の年代をもち、かつ石器製作のほぼ全工程を明らかにし得る奇跡的な接合資料が得られた八風山Ⅱ遺跡（長野県佐久市）が議論の出発点となる。大型原石を分割して盤状の剥片を用いた小口面型の石刃核から剥離された長狭な先細り石刃を素材として、基部の表面側に調整を施した基部加工尖頭形石刃の製作が中心となる。それに武蔵野台地Xb層の石器群が対比され、以降、房総半島を中心に関東地方の資料で、X層IX層の石刃生産技術の変遷が辿られる。

それでは、八風山Ⅱ遺跡の起源はどのように考えられるのだろうか。興味深いことにその評価については、見解が分かれている。基部加工尖頭形石刃の斉一的な形態から西アジアのエミレー型尖頭器と対比し、ユーラシアの初期後期旧石器時代（IUP）石器群の影響を見出す見解もある。これに対して、石刃生産技術がユーラシアIUP石器群とは類似しないとし、列島最古とはいえ3万6千年前なのだからその影響を否定する見解もある。ともに論理的には成り立つ見解で有意義な論争である。確かに八風山Ⅱ遺跡に対しては石刃生産技術以外にも、大型石刃+尖頭器+小石刃核に特徴づけられるユーラシアIUP石器群の基本組成との相違点を指摘することは容易である。先細り石刃に狙いを定めた小口面型石核消費により、基部加工尖頭形石刃を量産する姿は、列島に特殊化した石器群にもみえる。しかしその相違点により、指摘された類似点を他人のそら似の結果として、ユーラシアIUP石器群の影響を否定することは妥当なのだろうか。

それならば列島の石刃生産技術の発生を、他人の

そら似とする収斂進化説ではたして説明ができるのか。これに与するにはやや勇気がいる。約4万1千年前とされる韓国スヤング遺跡第VI地点4文化層が、大型石刃生産に特徴づけられる点でユーラシアIUPの流れにあるとするならば、そしてそれが近年明らかになったという事実を考慮すると、現在ある資料だけですべてを説明してしまうことに躊躇を覚える。

ことはIUPか後期旧石器時代前期（EUP）かの問題ではなく、列島における石刃生産技術の始まりが、ユーラシア東部におけるEUP期の地域適応の深化にともなう遺跡数の増加の一環で列島にもたらされたのか、あるいはユーラシア北回りルートを経由したユーラシアIUP石器群の本流から何らかの形で影響を受けたのかという議論にもつながる。筆者はこの問題に対しては、八風山Ⅱ遺跡が場の性格上、最古の石刃石器群の全貌を表現しているわけではないと考えるため、現状でどちらかに結論を下すのは時期尚早とみている。

### 2. 香坂山遺跡の石器組成

そこで同じく八風山の香坂山遺跡に着目した。この遺跡は上信越自動車道の八風山第2トンネルの立坑地上施設の建設に伴い発見され、1997年に長野県埋蔵文化財センターによりはじめて発掘調査が実施された。基部が加工された石器や折面等を利用した台形様石器は検出されていない。建物予定地の範囲では面的に発掘調査されて、中型剥片が中心のブロックが4か所検出された。それから約40m離れた斜面下方では、幅2mの限定的なトレンチ2本から、2点であるが大型石刃を含む石器群が検出されていた。それをみると幅3cm以上で長さが14cmの大型石刃と、長さ12cmの大型石刃が剥離されたブロック状の石刃核が含まれていた。石刃の形態は長

方形で先端は先細りしない。これに黒曜石の厚手剥片製で横断面取石核の範疇で理解できる平面タイプの小石刃核が組成する。限定的なトレンチで片鱗のみであるが、この遺跡の石刃生産技術や目的とする石刃の形態、石器組成は八風山Ⅱ遺跡と異なるようであり、列島における石刃石器群の起源を示唆する新たな情報が得られると直感した。

### 3. 発掘調査の概要

さて発掘調査は科学研究費を使用して2020年8月3日から9月18日まで行った。調査団などと共に調査組織を形成せずに、国武を届出上の担当者とし、堤隆氏（浅間縄文ミュージアム）と須藤隆司氏（明治大学黒曜石研究センター）を調査指導者として実施した。お二方には、新型コロナ感染拡大に伴う移動自粛が解除され調査にむけて始動した6月19日から、発掘調査を終了した9月18日に至る3か月の間、この夏のご予約を大いに狂わせてしまった。お詫びするとともに、鋭い知見と豊富なご経験に基づく献身的かつ野性的なご指導に心から感謝を申し上げます。また大竹憲昭氏をはじめとした長野県埋蔵文化財センターの皆様からは手厚いご支援を頂いた。さらに本学会および地元の佐久考古学会の会員の皆様からも多大なご協力を頂いた。ご支援ご協力頂いた皆様には深く感謝申し上げる次第である。

遺跡は八風山山中の標高1140mで周囲から屹立する幅広く平坦な尾根に立地している。遺跡の中心

と推定されたその尾根の平坦面を狙って7か所の調査区を設定し、合計約134㎡を3次に分けて発掘した。現在のところ第1次調査から第3次調査まで石器出土層位は同一であり、1997年の長野県埋蔵文化財センターの調査による石刃を含む検出層準とも同じとみている。

8月前半の第1次調査では、黒曜石製の小石刃と礫器石器群を検出した。8月後半の第2次調査では、大型石刃および尖頭形剥片と小石刃を検出した。石器製作の痕跡は少なく、製品が持ち込まれた地点にみえた。この第2次調査により、この遺跡の基本組成が大型石刃＋尖頭形剥片＋小石刃となる可能性がみてとれた。そしてこれに、刃部磨製石斧が伴うことも判明した。そして9月の第3次調査では、大型石刃と尖頭形剥片の製作跡が隣接して検出され、大型石刃の製作跡に含まれて小石刃の製作の痕跡もみられた。つまり、この遺跡の基本構成をなす3種の石器の製作跡が検出されたことになる。また石材原産地に近接する遺跡だが、原石の一次消費の痕跡は希薄で、主に目的とする石器が持ち込まれ、補完的に生産された場とみている。そのためか、目的とした3種の石器を明確に把握することができ、それぞれに対応する石核も併せて出土している。石核を中心に接合資料も得られる見込みであり、分析がすすめば技術的な特徴を詳しく読み取ることができるのではないかと考えている。



遺跡遠景（白色の円筒形建物が香坂山遺跡の位置。今回の調査地は写真で約1cm左下。奥は浅間山。大場正善氏撮影）

#### 4. 様々な苦勞？

この遺跡は、高速道路関連施設の建設に伴って発見されたわけだが、その施設が大規模トンネルの維持管理に係る立坑出口であったという点で、通常では発掘調査の対象になりにくい山中の尾根上という極めて特殊な立地の遺跡が見つかったわけである（直前に八風山Ⅱ遺跡を調査された須藤氏の知見が大きく寄与したのだろう。そういえば現在関東・中部で進められているリニアトンネルの立坑建設でも同様の遺跡はみつからないだろうか？）。しかも浅間山に由来する軽石が約2m硬く稠密に堆積した下層で、約50cmの斜面崩落土層にパックされたATの純層が20cmの厚さで堆積し（ココまで重機で掘削した）、その下層30cmに至ってようやく石器包含層に到達するという念の入れようである。石器を掘り出すには容易ではないのだが、層位的な条件は極めて恵まれており、石器が出土する層厚は20cm程度であることから垂直分布はそれほど上下に振れていなかった。とくに大型石刃や尖頭形剥片が出土するレベルはほぼそろっており、小石刃など小型の石器がその上下に多少拡散していた。石器が出土し始めてから出土しなくなるまで、発掘にあたった3名自らが竹べらで掘り上げ、土のう約500袋となった掘削廃土は、小石刃片など極小石器と炭化物試料



調査にあたる須藤隆司氏（左）と筆者（右），  
撮影は堤隆氏。



第2次調査石器出土状況（右手前に石刃が，左半に尖頭形剥片がまとまる。壁の白色の層はATの純層）

の回収のためにすべて持ち帰り水洗している。

筆者自身は例年の中央アジアの酷暑から逃れて高原の発掘に心洗われていたが、高原住まいの二人の調査指導者は真夏の炎天下で、まさか最初から最後まで自らだけで土を掘り、土を持ち上げ持ち帰ることになるとは思っておられなかったであろう。これは堪らんということになったのか（時々多摩蘭坂…とつぶやいておられた）、お二方から会員の皆様に連日（ヘルプの？）連絡が飛び、多くの協力者とともに発掘できたのは、予想外にも得難い経験となった。

一方で、山中に深く埋没して豊かな森に長く守られてきた稀有な遺跡であるだけに、国有林+水源かん養保安林+国定公園特別地域の保護規制がかかっていた。これに加えてすべてのトレンチの一部が、国から市に林地用地として貸出された範囲にかかっていた。このため文化財保護法の他に、国有財産法、森林法、自然公園法、道路法の許可申請が必要であった。さらに、法律上の許認可権限をもつ県と土地所有者である国、そして土地管理者の市の間で許可-承諾-許可の手順が厳密に設定されておりその複雑さに閉口した。その一方で、独立行政法人高速道路保有・債務返済機構の所有地については、国定公園特別地域の保護規制に加えて、高速道路関係の手続きが必要であった。同機構によれば、道路を造るために発掘調査をすることは多くあったが、道路ができた後に発掘調査の申請を受けたことは初めてなので手続きが定まっていない。かつ重機による大規模な掘削を予定している以上、動植物調査などのこれまで経験のある学術協力の範疇を超えているとのことであった。このため敷地管理にあたるネクスコ東日本関東支社の担当者は文化財保護法を読み込み、埋蔵文化財は国民共有の財産をうたう第4条まで持ち出して、同機構の説得にあたってくれたとのことである。

ともあれ林野庁、長野県、佐久市、同機構、ネクスコ東日本のすべての担当者に、本学術調査へのご理解と全面的なご協力をいただいたことにより、10件の届出・申請と11件の承諾・許可を経て、手続きを始めてから僅か5週間で発掘調査に着手することができたのである。

調査期間中はコロナ禍に見舞われていたが、これは調査を進めるうえではマイナスには働かなかった。また、昨年台風19号による豪雨で妙義荒船林道が損壊し、全面通行止めとなっていたことも、林道を挟む発掘現場で重機を取り回す必要から見てプラス要因であった（調査終了を待っていた

のか終了した翌日から突如復旧工事が始まり、ダンプカーが車列をなして行き交い始めた）。唯一マイナスに影響したのは、密集を避けるため現地説明会を開催することができなかったことである。これについては堤氏の提案で100名上限ではあるがオンライン説明会を開催することでその代替とした。通常の現地説明会では、調査担当の説明が始まる前に、参加者が調査区をめぐり、出土状況を眺めながらこれは何かと自ら見当をつけるのも楽しみの一つとなっている。それを再現するために、ドローンを飛ばして遺跡の遠景から高度を下げて徐々に調査区に近づいていき、最後は遺物の出土状況を至近距離で眺める動画を撮影し、説明する前に放映した。オンラインではあるが、遺跡を訪問いただいた気分を僅かながらでも味わっていただけたのではないだろうか。

## 5. 今後の予定

さて来年以降の計画であるが、可能であれば遺跡が広がる国有保安林の尾根方向に調査区を広げて、石器組成をさらに充実させたいと考えている。今回は樹木の伐採許可を得て一定の調査面積を確保した。また喫緊の課題は年代の確定である。炭化物を400点以上採取し遺存状態が良いものも含まれていた。放射性炭素年代測定分析を実施し、今年度中に見当をつけたい。そして同時期の列島およびユーラシアの石器群との比較を通じて、当初の目的であった列島における石刃生産技術の発生について、ユーラシアの動向に位置付けて解釈したいと考えている。

来年にはコロナ禍が終息し、多くの会員の皆様に瑞々しいミズナラの原生林に囲まれた本遺跡の発掘現場に直に立っていただき、列島では稀なこの石器群の出土状況をつぶさにご覧いただきたいと願っている。

## 2019年度日本旧石器学会賞受賞者報告

ニュースレター45号で報告しました通り、2019年度学会賞を保坂 康夫会員（身延山大学、山梨学院大学）、2019年度論文賞を高倉 純会員（北海道大学）が受賞されました。「日本旧石器学会賞選考委員会による選考理由」および「受賞者の言葉」を報告いたします。

## 2019年度学会賞

保坂 康夫 会員（身延山大学，山梨学院大学）

### 選考理由

学会賞は、旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員に授与する。学会員からの推薦に基づき、当委員会は保坂康夫会員を2019年度の学会賞受賞者として選考した。保坂会員は1980年代以来、40年近くにわたって礫群に関する研究に取り組み、2012年には『日本旧石器時代の礫群をめぐる総合的研究』を上梓した。本書では列島全体の膨大な礫群資料の悉皆的な調査に基づき、礫群の多様性や地域性を俯瞰する基礎的な研究に中心を据えながら、その分析には実験考古学的な視点も取り入れ、礫群の具体的な用途論や使用過程論にまで言及している。本書は、礫群の総合的研究書といえる。さらに、『旧石器研究』15（2019）には「礫群をめぐる砂川期の移動生活」を発表し、礫群をめぐる行動論的な研究を展開している。石器以外の出土遺物の極めて稀な列島の旧石器時代遺跡において、礫群研究の重要性に早くから注目し、基礎的な研究から列島の後期旧石器社会像に迫ろうとする保坂会員の考古学的な業績は学会賞に相応しいと考える。

（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 佐野勝宏）



保坂 康夫 会員

### 受賞の言葉（保坂 康夫）

この度は、栄誉ある2019年度日本旧石器学会賞を授与いただき、大変光栄なことと心から感謝申し上げます。思い返すと、静岡県磐田市の寺谷遺跡の発掘調査で礫群に出会い、旧石器人の生きた生活面を実感できたことが原体験となりました。行政調査に従事しながらも、1980～1990年代にかけては、礫群の実資料の属性分析による使用過程復元を目指しました。さらに、礫群の列島各地での分布状況を集成し分析したり、ブロックと礫群との関係性を石器母岩資料にまで立ち入って分析する研究を進めました。1990～2000年代にかけては実験的研究を進め、礫の被熱破碎や被熱礫の熱量に関する実験、人間動作の違いによる分布論的実験などを実施しました。この試みは、物理現象を軸として、過去と現在を取り結ぶミドルレンジ研究に通ずると自負しています。こうした研究成果は、学位請求論文『日本旧石器時代の礫群をめぐる総合的研究』に結実することができ、2012年に上梓することができました。近年は、礫群の有無や規模の違いによる遺跡分布の偏在性に着目し、旧石器人の二元対立的な社会生活が復元できるのではないかと取り組んでいます。

末尾になりましたが、先生方、先輩方をはじめ、これまでご指導・ご鞭撻いただいた皆様に心より感謝申し上げます。また、受賞についてご配慮いただいた日本旧石器学会の皆様衷心より御礼申し上げます。今回の受賞を機に、礫群研究がさらに注目され、若い世代の研究者がさらに増加することを、さらには礫群が文化財として伝えられ、後世の研究者に分析の機会が与えられますことを切に願って、受賞の言葉としたいと思います。ありがとうございました。

## 2019年度論文賞

高倉 純 会員（北海道大学）

### 選考理由

論文賞は、会誌『旧石器研究』に優れた業績を発表した会員に授与する。当委員会は高倉 純会員を2019年度の論文賞受賞者として選考した。高倉会員は『旧石器研究』14（2018）に「長崎県佐世保市福井洞窟出土石器群における剥離方法の同定—2012～2013年発掘資料を対象として—」，15（2019）に「長野県上水内郡信濃町大久保南遺跡出土石器群における剥離方法の同定」を発表している。両論文では、実験データに基づいたフラクチャーウィングの分析により、石器製作工程ごとの剥片剥離方法の同定がなされた。高倉会員は2004

年（『第四紀研究』43(1)）にこの同定法を発表して以来、北海道の遺跡から出土した様々な石器群への適用を実践してきた。『旧石器研究』誌上に発表された上記2本の論文も、それぞれ九州の細石刃石器群と後期旧石器時代前半期石器群に適用したもので、前者は細石刃石器群における押圧剥離技法の役割、後者は後期旧石器時代初頭石器群における石刃技法に関して議論され、旧石器時代の重要なテーマに切り込んでいる。以上の業績は、論文賞に相応しいと考える。

（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 佐野勝宏）

受賞の言葉（高倉 純）

この度は、2019年度日本旧石器学会論文賞を授与いただき、誠にありがとうございました。

受賞の対象となりました論文は、『旧石器研究』の第14号と第15号に掲載されたもので、それぞれは長崎県福井洞窟と長野県大久保南遺跡から出土した石器群を対象として、細石刃技術や石刃技術における剥離方法の同定をおこなうことを目的としていました。細石刃技術や石刃技術における剥離工程に関しては、これまで数多くの記載や比較の取り組みがなされてきたことは周知の通りですが、両論文では、剥離面に観察されるフラクチャー・ウィングや打圧面に観察される接触痕跡（微視的製作痕跡）の観察・測定を基に、どのような剥離方法が適用されて細石刃や石刃が剥離されているのかを明らかにすることに取り組んでいます。個別の石器群を対象とした地味な分析を取り扱っている内容の論文に光をあていただき、荣誉ある賞を授与いただけたことは、大変光栄であると感謝しております。日本列島における細石刃技術や石刃技術の出現・展開にかかわる理解の深化に剥離方法の同定分析が貢献していくためには、ユーラシア大陸での広域的な動向も比較の視野にいれながら、さらなる事例分析を蓄積していくことが必要ですが、研究成果の国際的な発信も含め、今後の課題として取り組んでいきたいと考えております。

論文で取り上げた資料の分析には、顕微鏡一式を何度も持ち込んでの作業が必要だったのですが、福井洞窟の出土資料に関しては佐世保市教育委員会の柳田裕三氏、大久保南遺跡の出土資料に関しては長野県立歴史館の大竹憲昭氏・町田勝則氏（当時）からは、御多忙のなか様々な御協力を賜り、大変お世話になりました。フラクチャー・ウィングの分析は、出穂雅実氏との共同研究として始めたものであり、また接触痕跡（微視的製作痕跡）の観察に関し

ては御堂島正氏から御教示を賜りました。石器の破壊力学研究については、山田しょう氏から御教示を頂戴してきました。論文の内容については私自身に責任が帰することは言うまでもありませんが、これまでの研究には多くの方々の御協力をいただいていたことを明記し、この場をお借りしてあらためて御礼を申し上げます。



高倉 純 会員

## 新刊紹介

### 『石器痕跡研究の理論と実践』

国重要文化財ともなっている神子柴遺跡の黒曜石尖頭器をステージに恐る恐る顕微鏡下に置いて観察したとき、最初に目に飛び込んできた画像は強烈だった。無数の線状痕が、しかも側縁部についていたのだ。神子柴の尖頭器は使用されており、しかもやりではなくナイフとして機能していた。さらにこの石器には100km以上もの距離を運ばれないとつかない運搬痕も残されていた。このように石器には数々の痕跡が刻まれている。

このたび御堂島正さんの編著になる『石器痕跡研

究の理論と実践』が上梓された。様々な角度から「痕跡」に焦点をあてた最初の書として是非手元に置きたい1冊である。コンテンツをあげておく。

- ・石器痕跡研究の現在（御堂島正）
- ・実験痕跡研究における形成理論の役割（中沢祐一）
- ・運搬痕跡研究とその考古学的意義（沢田敦）
- ・台形様石器の分析からわかる初期現生人類の技術と行動（山岡拓也）
- ・秋田県縄手下遺跡出土石器の使用痕分析（佐野勝宏）
- ・峠下型1類・美利河型細石刃核を伴う石器群の使用痕分析（岩瀬彬）
- ・製作痕跡の分析による尖頭器製作技術の解明（高倉純）
- ・磨石・石皿類の摩耗痕（上條信彦）
- ・使用痕から見た石製収穫具の身体技法（原田幹）
- ・有茎スクレイパーの利用法（高瀬克範）

原石が採取され、石器が製作され、石器が使用され、別の場所に運ばれ、メンテナンスされ、機能不全になって廃棄される、あるいはうっかりなくしてしまう。そして途方もない時間が経過して、我々の前に石器が現れる。

かつて、フリソン、あるいはディブルによる、リダクション・プロセスという視座の提示が、それまで固定的で変異のないものという石器の見方に新鮮な輝きをもたらしたことを思い出す。こうしたリダクション・シークエンスなども含め、そのライフヒストリーを語ってくれる痕跡研究の理論と実践を本書では深く学ぶことができる。

同成社 2020年10月刊 273頁 6000円＋税

【堤 隆】

### 『考古学ガイドブック』

哲学者を思わせる言説も多く、風貌もそれである小野昭さんが、入門書を書くときさぞや難解、と思いきや<あるある>で膝を打った。

「いいわね、あなたは、趣味が職業で・・・」私もしょっちゅう掛けられる言葉で「いや、まあ、その～」と卑屈に口ごもるが、小野さんほどの人も、どうやらそう言われることがわかる（笑）。

2頁見開きの解説文に新泉社らしいビジュアルなグラフィックス、頁をめくっていてとても楽しい本である。コンテンツをあげておく。

- 01 考古学・考古学者とは
- 02 なぜ発掘調査がおこなわれているのか
- 03 考古学は3Kな仕事？

- 04 発掘は最大の武器
- 05 土器の編年が考古学を鍛えてきた
- 06 さまざまな時間感覚
- 07 考古学の「時間」
- 08 「同時に存在した」ってどういうこと？
- 09 どうやって「時代」を区分しているのか
- 10 私たちの朝の食卓が後世に発掘されると
- 11 実測図に惑わされるな
- 12 分布論に冒険する
- 13 比較の大いなる可能性
- 14 復元とそれを確かめるには
- 15 文化財は残ったのではなく作られる？
- 16 太古の人骨のあつかいに制限はあるのか
- 17 分布の広がりとは国家
- 18 多様化・国際化する考古学
- 19 私の歴史？ 他者の歴史？
- 20 考古学者が書いた歴史は面白くない？
- 21 遺跡は誰のものか

考古学という幅広い学問領域を、たかだか96頁の冊子（しかもA5）で述べるのは、なにを扱い、どう切り捨てていくのかという点において、至難の業である。しかしこの書では、バランス良く項目が組み立てられ、しかも著者がこれまで追求してきた分布論や比較考古学にもうまく言及され、紛争と文化財、国際感覚や人権的な視点も盛り込まれた。

この紹介を書いている今、本書はアマゾンの考古学部門3位である。これは多くの方が手にするに違いない。初学者の入門テキストにはこれ以上ない本だからである。

新泉社 2020年10月刊 96頁 1600円＋税

【堤 隆】

### 研究会について

2020年度に予定されていた第18回研究会については、ニュースレター第45号でお知らせいたしましたように、新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み中止となりました。2021年度に実施する予定の研究会に関しては、開催時期・開催方式について現在、研究企画委員会によって検討と準備が進められている状況です。研究発表・ポスターセッション発表の募集等につきましては、決定次第、日本旧石器学会HPでお知らせいたします。

## 2020年度学会賞の推薦について

「日本旧石器学会賞規定」に則り、2020年度の学会賞受賞候補の推薦を募ります。旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員を推薦してください。

1. 推薦内容：学会賞受賞候補
2. 推薦期間：2020年10月1日(木)～2021年2月12日(金) (必着)
3. 推薦者の資格：日本旧石器学会員
4. 推薦方法：学会賞受賞候補の氏名、学会賞受賞候補の推薦理由、推薦者の氏名・連絡先をご記入の上、郵送もしくは電子メールにより下記の事務局あてに送付して下さい。
5. 注意事項
  - ・推薦は自薦・他薦を問いませんが、お一人につき一名を限度とします。
  - ・学会賞受賞候補は、日本旧石器学会会員に限ります。推薦にあたって、学会賞受賞候補ご本人の承諾を得る必要はありません。
  - ・推薦の書式は自由です。
  - ・推薦理由は概ね100字から300字にまとめてください。
6. 応募先・照会先：日本旧石器学会事務局  
(担当：渡辺丈彦・国武貞克・森先一貴)  
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45  
慶應義塾大学文学部 渡辺丈彦研究室気付  
(jimu@palaeolithic.jp)。

## お知らせ

### メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものですが、これまでその登録についてはあくまで任意のお願いというものでした。

一方、新型コロナウイルス感染拡大にとともに、各種学会行事の変更などがこれまで以上に増加することが予想され、学会と会員、そして会員間でのより迅速な情報共有が喫緊の課題となっています。その解決のためには、メーリングリストの更なる有効活用と登録率の向上が必要であることから、このたび役員会での議論と了承のもと、メーリングリストへの登録を原則として義務化することにいたしました。

た。ご理解を賜れば幸いです。

まだメーリングリストへの登録のお済みでない方は、携帯電話のメールアドレスでも構いませんので、事務局のメールアドレス (jimu@palaeolithic.jp) までお知らせください。

### 会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されていますので、会費は原則前納制としております。ニュースレター前号同封の払込取扱票を用いて、今年度分会費の納入をお願いします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続きいただけます。これまでもお知らせしておりますとおり、**2018年度より年会費が6,000円になりました**。御理解のほどよろしく申し上げます。

また、会費滞納は本会運営に大きな障害を招く原因になりますので、前号同封の会費納入状況を御確認のうえ、2019年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせて納入をお願いいたします。

転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等で御連絡ください。

### 日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード (<http://palaeolithic.jp/join.htm>) し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第46号

2020年12月17日発行

編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会

山崎真治・赤井文人・山田和史

発行: 日本旧石器学会

事務局: 〒108-8345

東京都港区三田2-15-45

慶應義塾大学文学部

渡辺丈彦研究室気付

E-mail [jimu@palaeolithic.jp](mailto:jimu@palaeolithic.jp)

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>